
追 悼 松本克己先生
Obituary KATSUMI MATSUMOTO

松本克己先生を偲んで

吉田和彦

松本克己先生が去る4月19日にお亡くなりになったというメールを同日夜に佐々木冠氏から頂いた。95歳の長寿を全うされた。この数年ご負担になることを懼れてメールを差しあげることを控え、いつかはその日が来ると受け止めていたもののやはり悲しみに耐えない。

先生は『言語研究』に6篇の論文と3篇の書評を発表され、日本言語学会の活動に多大な寄与をされた。しかしわたしにとってそれよりも忘れることができないのは、言語学会が1993年に直面した難局を会長として見事に乗り切られたことである。当時の役員でいまも役員として残っているのは5名にすぎず、現在の会員のなかで事情を知っているのはほんの一握りと思われるので、この出来事について記しておきたい。1993年春に当時学会事務支局が置かれていた三省堂から1994年3月限りで事務業務を退きたいという申し入れがあった。松本会長は事務支局を含む学会の運営体制について早急に対策を講じるために「事務局対策委員会」を編成し、議論を重ねられた。そして1993年秋の評議員会において、学会事務支局を京都の中西印刷に移転し、それまでの事務支局の仕事だけでなく、従来学会事務センターに委託していた会員業務、および『言語研究』の印刷刊行も一括して同社に委託することが了承可決された。しかしながらこれで問題が解決されたわけではなかった。当時の学会の財政状況はきわめて深刻であった。彙報の1993年度学会予算によると、前年度からの繰越額は671,335円となっている（ちなみに2024年度の前期繰越額は13,386,033円とほぼ20倍である）。この状況では事務支局の移転に関わる経費すべてを学会が負担することは困難であった。そこで当時の役員一人当たり一万円の寄付を募られた（松本先生は会長としてそれよりはるかに多い額を寄付された）。これは苦渋のご決断であったにちがいない。今日の言語学会の発展の背後にはこのような歴史があったことを、現在の学会諸活動を享受している会員諸氏にはぜひ語り継いでいって欲しいと思う。

わたしが松本先生と初めて話す機会を持ったのは1979年秋の京都大学での言語学会大会のときだった。大学院生だったわたしは司会である先生の隣に座って時計係を務めた。休憩時間に先生は同年春の大会でのわたしのゴート語に関する研究発表をよく覚えていとおっしゃった。碩学が記憶してくださっていることに感激す

ると同時に少し誇らしい気持ちにもなった。そして翌年12月に先生は京都大学で「印欧言語学の諸問題」と題する集中講義を行われた。主なトピックは喉音理論、子音組織そして語順の変化の3つであった。まだ板書中心の講義が多かった時代に英文タイプで用意された授業資料は新鮮に映った。喉音理論に関する講義では、ソシュールの『印欧語原始母音組織考』と喉音理論を確立したバンヴェニストとクリウオーヴィッチの研究の的を射た紹介がなされ、初期の喉音理論の発展を理解するうえで有益であった。次に伝統的に再建されている印欧祖語の子音組織を類型論の観点から再検討され、両唇の位置での対応が少ない*b, *d, *g, *g^wという有声無気の系列は喉頭化音（放出音）(*pʔ, *tʔ, *kʔ, *qʔ)として再建されるべきという旧ソ連のガムクレリーゼとイワノフによって初めて提唱された説に賛意を示された。その論拠のひとつは喉頭化音について両唇の位置でギャップがみられる傾向があるのは、喉頭上昇による口腔内の圧力上昇が必要なために口腔内の容積が小さいほど破裂に要するためのエネルギーが少なくて済むからであり、印欧祖語における*bの対応の少なさがよく説明できるということである。松本先生はヤコブソンと同じく比較対応に基づいて再建される体系においても人類言語としてありえないタイプを考えてはいけないという強い信念を持っておられた。しかしながら*bを指し示す対応はリトアニア語 *dubùs* ‘deep’, ゴート語 *diups* など少ないながらも存在する。対応が欠けているというのと少ないというのは、わたしには違った意味があるように思えた。また再建の目的は祖語を建てること自体ではなく祖語から分派諸言語の先史を説明する点にある。この点で喉頭化音（放出音）(*pʔ, *tʔ, *kʔ, *qʔ)が分派諸言語の多くで有声無気閉鎖音になるプロセスが十分によく理解できなかった。わたしはその後の研究において「祖語を無限に遡って再建することは不可能である。歴史的現実によって支えられる段階の再建で満足しなければならない。」というクリウオーヴィッチの警句にむしろ共感するようになっていった。最後の語順変化の講義のもとになったのは先生が『言語研究』68号に発表された「印欧語における統語構造の変遷について」という論文の解説であった。この論文をわたしは学生時代に何度も繰り返し読んだ。英語、ドイツ語、フランス語などで書かれた基本文献を自在に読み解く能力、ギリシア語、ラテン語、サンスクリットなど古典語に関する造詣の深さ、そしてハンドブックから学ばれた他の印欧諸語や世界の諸言語についての豊かな知識を駆使しながら、縦横無尽に論を展開しておられることに感銘を受けた。先生のお考えは日本語の定動詞と異なり、印欧語における定動詞は語としての自立性があり、語順の違う非印欧語との接触によって語順変化が生じたというものである。ただケルト語はVSO言語であり、その先住民族の姿は霧に包まれている。そして次第に語順変化の原因を外的要因ではなく、むしろ内的要因に求めるという基本姿勢をわたしは取るようになった。

松本先生は印欧語研究のみならず、日本語の音韻史の分野でも貢献された。『金沢大学法文学部論集』22（1975）において発表された「古代日本語母音組織考——内的再建の試み」と題する論文は上代日本語の母音組織が5母音であったと主張さ

れ、大きなセンセーションを斯界に与え、反響を呼んだ。この論文は内的再建の実践例であり、そのタイトルについては先に触れたソシュールの内的再建法による輝かしい成果である『印欧語原始母音組織考』を意識されておられたに違いない。また言語類型論の観点からも日本語学の世界の常識とされていた大野晋氏の上代日本語8母音説を激しく批判された。『月刊言語』5-6(1976)に寄稿された「日本語の母音組織」というエッセイのなかで、1976年2月にNHKでコンピュータを使って昔の日本語の発音を復元するという趣旨の放送が行われ、8母音説にしたがって発音指導を受けた女優が万葉の歌を朗読したあと「とにかく母音が難しくて」と述懐していたことについて、「全く同感である」と記しておられる件りには頬が緩んでしまった。

晩年の松本先生は日本語の系統問題に大きな情熱を傾けられておられた。2012年12月に京都大学で開催された「日本語の起源と古代日本語」という公開シンポジウムでは「私の日本語系統論——言語類型地理論から遺伝子系統地理論へ——」という壮大なスケールのご講演をなされ、そのあとのコメントータをわたしは仰せつかった(この講演会の内容は2015年に臨川書店から出版されている)。コメントのなかで「言語類型地理論と遺伝子系統地理論というマクロの視点からの新しい方法を用いて、日本語の歴史の輪郭を提示されました。それにより日本語の起源がおぼろげながら見えてきたように思われます。」とわたしは述べた。しかしながら類型論や古人骨に残されたDNAの解説を手掛かりにして人類の足跡をたどる方法が系統問題の解決の決め手にならないことはよく知られている(人類の移動と文化の拡がりは必ずしも一致しない)。おそらく松本先生は伝統的な比較対応に基づく方法論では、新資料が発見されていない状況のなかで系統問題は袋小路に陥ったままで、いつまで経っても解決されないと考えられ、マクロの視点からの方法に活路を見出そうとされたように思う。

ご生前に先生の考えとは違う意見を述べたことが幾度かある。そのときいつも先生は気を悪くされるどころか、関心を示されてむしろフレンドリーにご対応してくださった。それは研究者として真理、普遍的な価値の追究を何よりも重んじておられたからだと思える。最後に松本先生との個人的な思い出に触れておきたい。1995年の秋に東北大学で開催された言語学会大会の前日の夕方に、庄垣内正弘氏とわたしはホテルのロビーで松本先生に偶然お会いした。夕食を共にしようという話になったとき、先生は「以前仙台に来た時に千種眞一氏が連れて行ってくれた店のほうが絶品であった。その店の場所はうろ覚えであるが、いまから歩いて捜そう。」とおっしゃった。関西からの長旅のあと一刻も早く麦芽入り炭酸水を口にしたい庄垣内氏とわたしは当惑し顔を見交せたが、先生の希望(というか執念)に抗うことはできなかった。そして仙台の街を歩くこと30分。ついにその店が見つかった。しかしながら季節外れのためにほやを賞味することは叶わなかった。

信州で生まれ育った松本先生は三方を山に囲まれた京都の町が好きだとおっしゃっていた。いま町を歩きながら空を見上げると、お好きだった京都の景観を愛

でながら、遥かな天空の一隅から残されたわたしたちを静かに見守ってくださっているような思いになる。ご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

(京都産業大学客員教授／京都大学名誉教授)

松本克己先生の御逝去を悼んで

山本秀樹

謹んで松本克己先生の御逝去を悼み、衷心より惜別の辞を捧げます。

松本先生には、先生が金沢大学から筑波大学に移られて間もなく、大学院で御指導を賜りました。これは生前、先生に直接申し上げたことはありませんが、今正直に申し上げますと、松本先生の厳格な御研究と御風貌から、とても厳しい怖そうな先生というのが第一印象でございました。しかし、実際に入学して御挨拶に伺いますと、先生は流山にお住まいでしたので、「山本君は隣の野田に住んでいるんだね」というお言葉から始まって、とても柔和な表情で優しく語りかけてくださり安堵したことを覚えております。

松本先生とは、御自宅が私の家と近いことから帰りが一緒になることも多く、時にお酒をいただきながら毎回楽しくお話をさせていただきました。言語学の話を楽しそうにされる顔を拝見し、松本先生は本当に言語学を愛していच्छるということがよくわかりました。これは、また同時に私にとりましては、大学の外で松本先生から一对一の個人指導を賜ることができたということでもあり、この上なく贅沢な大学院生活を送らせていただけたことを、誠に有り難く存じております。

私が弘前大学に赴任した後も、夏休みや年始の際に御自宅にお伺いし、御指導いただいておりますが、そのたびに先生と奥様は温かく迎えてくださり、不遜にも松本先生御夫妻には不肖の私の仲人までお願いしてしまいました。

奥様が先に逝去され、先生が高齢者向け住宅に入居された後も御挨拶に伺っていましたが、コロナ禍により面会もかなわなくなりました。私からは年賀状で近況をお知らせして、先生の御健康をお祈りしておりましたが、この四月十九日に御逝去のお知らせをいただき、誠に哀惜の念に堪えません。

松本先生の御研究は多岐にわたりますが、私が御指導いただいて以降の御研究の特徴をあえて一言で申し上げれば、従来の言語学に対して、実証性を損なわない範囲で空間的にも時間的にも、より広い視野から人類言語を考察されたことであると思います。私自身、そのような視野から初めて見えてくる世界があり、重要な知見が得られるということを学ばせていただき、松本先生は、私にとりまして常に偉大な目標であり、敬愛の対象でした。

松本先生から直接御指導をいただくことはかなわなくなり寂寥に堪えませんが、

奥様と再会してお二人で会話される御様子を想像しますと、少しは心が安らぐ思いがいたします。これからも先生から賜った御恩を少しでも報じられるよう精進していきたいと存じます。

松本先生のこれまでのお導きに心より感謝し、先生の御冥福をお祈り申し上げます。ありがとうございました。

(以上は令和7年4月24日に執り行われた故松本克己先生の御葬儀で奉読した弔辞に一部修正を加えたものである。)

(弘前大学名誉教授)

恩師松本先生

新田哲夫

松本克己先生は、1956年3月に東京大学大学院を修了された後、同年4月、金沢大学法文学部専任講師として赴任され、1964年に助教授、1975年に教授となられた。その後1982年4月からは金沢大学と筑波大学文芸・言語学系教授と併任、1983年に転出されるまで、27年間にわたって金沢大学で教鞭をとられた。筑波大学では11年間、その後の静岡県立大学では5年間奉職されたので、金沢大学の教官としての生活が最も長いことになる。

私が金沢大学で先生から言語学を教わったのは、1978年の10月からで、先生が文部省在外研究員として英国、ギリシアを1年半かけて回ってこられて帰国された直後だった。この時代、金沢大学法文学部哲史文学科（後の文学部）のキャンパスは金沢城内にあり、その学科の言語学研究室は、戦後の新制大学発足時から存在する伝統ある研究室だった。だが、当時、学内の研究室としては人気がなく、私が進学した年は6回生の学生が一人のみで、私は久しぶりの進学者だった。その後学部生二人、大学院生一人が入り、研究室全体で学生数五人になったが、英文や国文研究室と比べ、相変わずの小所帯であった。松本先生のご帰国までは、専任講師の上野善道先生がお一人で研究室を切り盛りされていたが、松本先生が帰国されてようやく教育体制が整い、研究室が活気を帯びてきたといえる。

言語学の専門の授業は、大抵、共同研究室で行われた。松本先生の授業は、入室後、まず教授席の肘掛け椅子を三、四回ぐるぐる廻して（ネジが緩んでいた）ぐらつきを止めてから着席し、出されたお茶に口をつけてから、おもむろに始まった。学部時代に松本先生から教わった授業科目を思い出すまにあげると、「言語学特殊講義」では「比較言語学」（高津春繁『印欧比較文法』岩波全書、H. Krahe, *Indogermanische Sprachwissenschaft, I, II*）や「ギリシア語音韻史」（W. Brandenstein, *Griechische Sprachwissenschaft, I*）、「特殊語学」では「現代ギリシア語」（関本至『現代

ギリシア語文法』)や「サンスクリット語」(J. ゴンダ『サンスクリット語初等文法』), 「言語学演習」では外書講読(Th. Bynon, *Historical Linguistics*)というのが学部時代を通じてのラインナップだった。当時は配布用のコピー資料もなかったので、口頭で述べられた内容と黒板に書かれたことをノートに書き取るしかなかった。先生は、流麗なギリシア文字をすらすら書いていっては説明が終わるとさっさと消してしまわれるので、最初は面食らった。松本先生の授業には、上野先生も出席され、学生とともに受講されていた(サンスクリット語を除く)。上野先生はただ聞くだけではなく、授業の終盤に、本質的かつ深淵な質問をされ、それに松本先生は毎回丁寧に答えていらっしゃった。そのディスカッションは今でいうドリームマッチだったはずだが、私のような未熟な学生にとっては猫に小判で、二限目の延長は勉強になる有難さより空腹の方が勝るという情けない有様だった。サンスクリット語の授業は、受講者が学生二人だけで、初級文法を丁寧に教わった。主に印欧比較文法の観点からの解説もあり、その点はやや上級者向けだった記憶である。期末試験終了後、学生二人の答案を回収して、目の前で即採点されたのには面食らった。試験準備では練習問題の語彙が全然頭に入らなかったのも、ヤマをはって最初の音論の sandhi、動詞分類、set 語幹の歴史的な説明を丸暗記して臨んだところ、何とか単位をいただけた。「ほう、これはできている。これはダメ」と赤ペンで採点している松本先生のお姿を思い出す。そうしたことは細かく覚えているのに、講義内容は忘却のかなたにある。

1981 年ごろ金沢大学大学院で言語類型論の授業を受けた。J. Greenberg の Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements に出てくる法則を一つ一つ批判的に吟味していく内容だった。筑波大学に移られてから先生の類型論研究は本格化し、その後大きく開花することになるが、金沢大学時代にすでにご研究が開始されていたことになる。私の関心はこの時分から日本語方言の調査研究にあったので、学部時代の情熱を保つことができなかった。ヒッタイト語の授業も開講されていたが、受講を途中でやめてしまった。今思えばもったいないことをしたと悔やまれる。

先生から多くのことを学び、45 年以上の歳月を経て、その多くを忘れてしまったが、思い出せることもある。おそらく Bynon の *Historical Linguistics* の講読のなかでおっしゃられたことだったと思うが、「ジリエロンが言ったとされる“語にはそれぞれ歴史がある”というのは音法則の規則性とは矛盾しない。それは言語変化の漸次性を反映するものだ。」また、「ソシュールの共時論、通時論は一種の作業仮説であり、この二分法の厳密すぎる適用はよくない。なぜなら共時態は歴史の積み重ねであり、そこに通時的なものが含まれているのは当然であるから。」先生の教えによって、自分の言語史観が形成されたのはほぼ間違いないことだと思う。

先生はお酒はお好きな方だったが、私が在学中は先生と飲む機会は少なかった。ただ、筑波大学に転出された 1983 年の秋、神戸大学で開催された言語学会の懇親会のあと、こちらがお誘いして、神戸市内のハンター坂にあるレストランバーで、

二人でウイスキーを飲んだことがある。先生ご夫妻に仲人になってもらうお願いをするために、お連れしたのだった。大変貴重な機会だったにもかかわらず、他にどんな話をしたか、思い出せない。ただ、そのとき二人で I. W. Harper のオンザロックを飲み、先生はこのバーボンを気に入りおかわりされたこと、帰りの暗い坂道がやたら長く感じたことだけが思い出される。あのとき狭い歩道を先に降りられる先生の面影と、遠くに逝かれた現実をつい重ね合わせてしまう。

先生は、印欧比較言語学がご専門であり、ヨーロッパの主要言語の文献を読み、ギリシア語・ラテン語の西洋古典学、サンスクリット語他に精通し、ヒッタイト語や古いギリシアの粘土板の文字資料を渉獵し、古代日本語音韻論、日本語系統論、言語類型論、遺伝学にも学問の範囲を拡げられた。まさに日本の言語学界の巨星だった。上野善道先生もおっしゃっていたが、おそらく今の日本ではこのような学者は現れないだろう。私は先生の金沢大学時代の壮年期に、先生の学説の一部にわずかでも触れることができ、幸せな時間を過ごすことができた。不肖の弟子ながら、松本先生を恩師と呼べることは大変有難く、ただただ感謝の気持ちしかない。

(金沢大学名誉教授)

略年譜

- 1929（昭和4）年10月25日 長野県長野市川中島町御厨（旧更級郡御厨村）にて出生
- 1942（昭和17）年4月 長野県立長野中学校（旧制）入学
- 1946（昭和21）年3月 同4年修了
- 1946（昭和21）年4月 旧制松本高等学校文科乙類入学
- 1949（昭和24）年3月 同卒業
- 1949（昭和24）年4月 東京大学文学部言語学科（旧制）入学
- 1953（昭和28）年3月 同卒業
- 1953（昭和28）年4月 東京大学人文科学研究科修士課程言語学専攻入学
- 1956（昭和31）年3月 同修了
- 1956（昭和31）年4月 金沢大学法文学部専任講師
- 1964（昭和39）年5月 同助教授
- 1975（昭和50）年4月 同教授
- 1977（昭和52）年3月～1978（昭和53）年9月
文部省在外研究員として英国（ケンブリッジ大学）、ギリシア（アテネ大学）に在籍
- 1982（昭和57）年4月 筑波大学文芸・言語学系教授に併任
- 1983～1985（昭和58～60）年
『言語研究』編集委員長
- 1983（昭和58）年10月 同教授に配置替え
- 1986（昭和61）年5月～1990（平成2）年3月
同大学文芸・言語学系長
- 1987～1991（昭和62年～平成3）年
国際言語学者会議常置委員会日本代表
- 1991（平成3）年4月～1994（平成6年）3月
日本言語学会会長
- 1991（平成3）年6月 金沢大学名誉教授
- 1992～1994（平成4年～6）年
文部省学術審議会学術用語分科会専門委員
- 1993（平成5）年3月 筑波大学定年退官
- 1993（平成5）年4月 静岡県立大学国際関係学研究科（特任）教授
- 1994（平成6）年～現在 日本言語学会顧問
- 1994～1997（平成6年～9）年
日本学術会議言語学文学研究連絡委員

- 1994～1998（平成6年～10）年
文部省大学設置審議会専門委員
- 1994（平成6）年4月～1998（平成10）年3月
静岡県立大学国際関係学研究科長
- 1995～1998（平成7年～10）年
静岡県アジア・太平洋学術フォーラム設立委員
- 1998（平成10）年3月
静岡県立大学定年退官
- 1998（平成10）年4月
静岡県立大学名誉教授
- 2009（平成21）年11月
瑞宝中綬章受章
- 2025（令和7）年4月19日
逝去

主要著作目録

【著書】

- 1967年 *On the Vowel System of Ionic-Attic: a diachronic phonological study.* Department of Linguistics, Kanazawa University.（単著）
- 1981年 「ギリシア・ラテン文字の発展」『世界の文字』（大修館書店）：73-106.（共著）
- 1985年 「言語と民族」『ヨーロッパ文明の原型』（民族の世界史8：山川出版）：157-214.（共著）
- 1995年 『古代日本語母音論：上代特殊仮名遣の再解釈』東京：ひつじ書房.（単著）
- 2005年 「世界の言語：その現状と未来」『21世紀後半の世界の言語はどうなるのか』（「二一世紀後半の言語」シンポジウム企画班）明石書店：133-187.（共著）
- 2006年 『世界言語への視座：歴史言語学と言語類型論』東京：三省堂.（単著）
- 2007年 『世界言語のなかの日本語：日本語系統論の新たな地平』東京：三省堂.（単著）
- 2010年 『世界言語の人称代名詞とその系譜：人類言語史5万年の足跡』東京：三省堂.（単著）
- 2014年 『歴史言語学の方法：ギリシア語史とその周辺』東京：三省堂.（単著）
- 2016年 『ことばをめぐる諸問題：言語学・日本語論への招待』東京：三省堂.（単著）

【翻訳】

- 1960年 エウリピデス「アンドロマケ」『ギリシア悲調全集』3（人文書院）：152-189.
- 1960年 オウイディウス「名婦の書簡」（抄訳）「黒海からの便り」『世界名詩大成』1（平凡社）：174-188.
- 1963年 オウイディウス「名婦の書簡」（撰）『世界短編文学全集』8（集英社）：149-169.

- 1965 年 エウリピデス「イオン」『世界古典文学全集』9（筑摩書房）：217-251.
 1966 年 オウイディウス「名婦の書簡」（全訳）『世界文学大系』69（筑摩書房）：305-349.
 1969 年 オウイディウス『転身譜』（全訳）『世界文学全集』2（筑摩書房）：123-440.
 1986 年 R. ヤーコブソン／L. ウォー『言語音形論』東京：岩波書店.
 1992 年 B. コムリー『言語普遍性と言語類型論』（山本秀樹と共訳）ひつじ書房.
 2003 年『ヨーロッパ言語事典』（松本克己監訳、山本秀樹、佐々木冠、山田久就訳）東京：東洋書林.

【論文】

- 1958 年 ホメーロスにおける Explicative Particle, 『金沢大学法文学部論集文学編』6: 80-92（同題の卒業論文（1953）の要約）.
 1959 年 イーリアス第24歌のいわゆる新しさについて, 『西洋古典学研究』7: 65-72（同題の修士論文（1956）の縮約）.
 1963 年 言語の働きの中の二つの相：Syntagmatica と Paradigmatica：文法論の基礎づけのための試論, 『金沢大学法文学部論集文学編』11: 95-131.
 1964 年 ギリシア語の時称体系について：特に phemi の活用を中心に, 『金沢大学法文学部論集文学編』12: 79-104.
 1966 年 イオニア・アッティカ方言の母音体系について：通時音韻的考察, 『金沢大学法文学部論集文学編』14: 78-147.
 1970 年 ギリシア語における *s の消失をめぐる方言史的考察, 『金沢大学法文学部論集文学編』18: 23-76.
 1971 年 ギリシア語の歴史：特に方言の形成とその系統的関係について, 服部四郎編『言語の系統と歴史』（岩波書店）：111-139.
 1972 年 アイオリス方言の性格とその系統について, 『現代言語学（服部四郎先生定年退官記念論文集）』（三省堂）：689-703.
 1972 年 ホメーロスの言語の方言的・年代的諸相, 『西洋古典学研究』20: 20-39.
 1973 年 エーゲ海域におけるギリシア語前の言語層の問題：Kretschmer の学説とその展開をめぐる, 『金沢大学法文学部論集文学篇』20: 45-97.
 1975 年 印欧語における統語構造の変遷：比較類型論的研究, 『言語研究』68: 15-43.
 1975 年 古代日本語母音組織考：内的再建の試み, 『金沢大学法文学部論集文学編』22: 83-152.
 1975 年 上代語の母音組織, 『毎日新聞』昭和50年1月23日.
 1976 年 日本語の母音組織, 『月刊言語』5-6: 15-25.
 1976 年 万葉仮名のオ列甲・乙について, 『月刊言語』5-11: 72-80.
 1981 年 印欧祖語の子音組織：類型学的考察, 『月刊言語』10-3: 84-94.
 1984 年 言語史の再建と言語普遍, 『言語研究』87: 5-32.

- 1984 年 クサントスのレーターオーン出土の三言語併用碑文とリュキア語研究の現状：特にその統語構造を中心に、『オリエント』26: 95-118.
- 1985 年 印欧アナトリア語派におけるリュキア語の位置：特にリュキア語の複数主格及び属格語尾をめぐって、『京都産業大学国際科学研究所所報』6-2: 24-53.
- 1986 年 ミノア文字研究の現状：特に線文字 A を中心に、『京都産業大学国際言語研究所所報』7-2: 29-67.
- 1986 年 能格性に関する若干の普遍特性：シンポジウム「能格性をめぐって」を締めくくるために、『言語研究』90: 169-190.
- 1986 年 歴史言語学入門、『月刊言語』15-8: 152-159.
- 1986 年 言語史にとっての 60 年、『言語生活』410: 14-21.
- 1986 年 通時的にみたことばの記述：歴史言語学の原理と方法、『応用言語学講座』（明治書院）2: 3-21.
- 1986 年 ギリシア語の動詞組織、『国文学解釈と鑑賞』51-1: 169-171.
- 1987 年 語順のタイプとその地理的分布：語順の類型論的研究その 1、『文芸言語研究（言語編）』（筑波大学）12: 1-114.
- 1987 年 日本語の類型論的位置づけ：とくに語順の特徴を中心に、『月刊言語』16-7: 42-53.
- 1987 年 語順の話、『ぶっくれっと』（三省堂）No. 70: 10-15.
- 1987 年 日本語と印欧語、『国文学解釈と鑑賞』53-1: 41-46.
- 1988 年 印欧語の世界（印欧言語学への招待 1）、『月刊言語』17-1: 15-21.
- 1988 年 印欧語の母音組織（印欧言語学への招待 2）、『月刊言語』17-2: 87-91.
- 1988 年 印欧語の母音交替と喉音学説（印欧言語学への招待 3）、『月刊言語』17-3: 93-97.
- 1988 年 印欧語の語順のタイプ（印欧言語学への招待 4）、『月刊言語』17-4: 88-93.
- 1988 年 印欧語の形態法—とくに名詞の格組織—、『月刊言語』17-5: 104-109.
- 1988 年 印欧語の名詞形態法の起源、『月刊言語』17-6: 86-93.
- 1988 年 孤立無援の言語エトルリア語、『月刊言語』18-8: 128-133.
- 1988 年 印欧語における能格性の問題、『東京大学言語学論集 '88』: 1-19.
- 1989 年 語順のタイプと線状化の原理—語順の類型論的研究：その 2—、『文芸言語研究』言語篇（筑波大学）15: 1-67.
- 1990 年 言語類型論と歴史言語学『国文学解釈と鑑賞』55-1: 6-11.
- 1991 年 Sprachbund phenomena in Europe: An attempt to outline the European areal features, *Kansai Linguistic Society* 11: 3-20.
- 1991 年 主語について、『言語研究』100: 1-41（『著 3』収録）.
- 1992 年 犬も歩けば棒に当たる：言語類型論、『月刊言語』21-7: 56-59.
- 1992 年 Distributions and variations of word order: a typological and areal study, *Kansai Linguistic Society* 12: 155-164.

- 1993 年 言語現象における中心と周辺, 国文学『解釈と鑑賞』58-1: 6-13.
- 1993 年 「数」の文法化とその認知的基盤, 『月刊言語』22-10: 36-43.
- 1993 年 主語のない文法モデル: 一つの試案, 『学習院大学言語共同研究所紀要』16: 55-63.
- 1993 年 Problem of ergativity in Indo-European, *Journal of Indo-European Studies* 21: 303-330.
- 1994 年 日本語における動詞活用の起源, 『語源探求』4: 102-126.
- 1994 年 語順のデータベース, 『日本語学』13-1: 99-106.
- 1994 年 言語圏としてみたヨーロッパ, 英米文化叢書『変容する言語文化研究』静岡県立大学英米文化研究室: 1-12.
- 1994 年 日本語系統論の見直し: マクロの歴史言語学からの提言, 『日本語論』2-11: 36-51.
- 1995 年 言語研究と意味, 『国文学解釈と鑑賞』60-1: 6-16.
- 1995 年 一万年前の原日本語を探る, 月刊『現代』29-2, 1995 年 2 月号: 226-230.
- 1995 年 日本語・タミル語同系説に対する言語学的検証: 大野晋氏へのお答えにかえて, 『国文学解釈と鑑賞』60-5.
- 1995 年 語順の分布と語順の変化, 『言語文化研究の新展開』(静岡県立大学英米文化研究室): 101-124.
- 1996 年 日本語の系統, 諏訪春雄・川上湊編『日本人の出現: 胎動期の民族と文化』(雄山閣): 136-166, 218-225.
- 1997 年 文部省『学術用語集言語学編』について, 『日本語学』16-2: 31-41.
- 1998 年 形容詞の品詞的タイプとその地理的分布, 『月刊言語』27-3: 18-25.
- 1998 年 流音のタイプとその地理的分布—日本語ラ行子音の人類言語史的背景『一般言語学論叢』1: 1-48.
- 1998 年 ユーラシアにおける母音調和の二つのタイプ, 『言語研究』114: 1-36.
- 1999 年 世界言語の数詞体系とその普遍的基盤, 『月刊言語』28-10: 22-29.
- 2000 年 日本語の系統と“ウラル・アルタイ説”『日本エドワード・サピア協会研究年報』14: 1-25.
- 2000 年 世界諸言語の類型地理と言語の遠い親族関係, 遠藤光暁編『言語類型地理論シンポジウム論文集』96-135 (「中国における言語地理と人文・自然地理 7」文部省科学研究費研究成果報告書).
- 2000 年 世界諸言語のキョウダイ名: その多様性と普遍性, 『一般言語学論叢』3: 1-55.
- 2001 年 日本語の系統: 回顧と展望, 『言語研究』120: 89-96.
- 2003 年 日本語の系統: 類型地理論的研究, 『日本語系統論の現在』(日文研叢書 31)(アレキサンダー・ボビン／長田俊樹共編) 41-129.
- 2004 年 類型論から見た主語現象, 『月刊言語』33-2: 50-59.
- 2005 年 新説・日本語系統論: 類型論から探る言語の遠い親族関係, 『月刊言語』

34-8: 14-23.

- 2005 年 日本語の系統：類型地理論的アプローチ、『朝倉日本語講座 1 世界の中の日本語』（朝倉書店）：147-173.
- 2007 年 人称代名詞から探る言語の遠い親族関係：「環太平洋言語圏の輪郭」, EX ORIENTE（大阪外国語大学社会学会誌）Vol. 14: 327-367.
- 2012 年 イネ・コメ語源考, 文芸誌『大地』第 48 号：80-87.
- 2012 年 イネ・コメの比較言語学, 『歴史言語学』第 1 号：87-105.
- 2015 年 私の日本語系統論：言語類型地理論から遺伝子系統地理論へ, 『日本語の起源と古代日本語』（臨川書店）：95-139.

【百科事典項目等執筆】

『小学館新百科事典』1983 年：言語学関係：「エトルリア語」, 「ギリシア語」, 「グラモン」, 「死語」, 「ジーフェルス」, 「シュミット」, 「シュライヒャー」, 「祖語」, 「デルブリュック」, 「ドイツ文字」, 「トカラ語」, 「トムセン」, 「比較言語学」, 「ヒッタイト語」, 「フェニキア語」, 「ブルークマン」, 「ポップ」, 「メイエ」, 「ラスク」, 以上 19 項目.

西洋古典関係：「アルス・アマトリア」, 「オウイディウス」, 「サチュリコン」, 「転身譜」, 「ペトロニウス」, 以上 5 項目.

『言語学大辞典』第 1～5 巻：世界言語編（三省堂 1988-1992 年）：「アナトリア諸語」, 「エトルリア語」, 「ウラルトゥ語」, 「カリア語」, 「ギリシア語」, 「近代ギリシア語」, 「古代マケドニア語」, 「象形文字ルウィー語」, 「トラキア語」, 「ハッティ語」, 「ヒッタイト語」, 「フルリ語」, 「パラ語」, 「ブリュギア語」, 「ミュケナイ・ギリシア語」, 「リュキア語」, 「リュディア語」, 「ルウィー語」, 以上 18 項目.

『言語学大辞典』第 6 巻：術語編（三省堂 1996 年）：「言語変化」, 「ドリフト」, 「文法構造の変化」, 「文法化」, 「統語法の変化」, 「形態法の変化」, 「類推」, 「異分析」, 「転換」, 「(品詞の) 牽引」, 「接置詞」, 「方格」, 「ヴァッケルナーゲルの法則」, 「音変化（音韻変化）」, 「通時音韻論（史的音韻論）」, 「音法則（音韻法則）」, 「同化」, 「異化」, 「合流（併合, 融合）」, 「分裂（分化）」, 「イソクロニー」, 「音素の消失（音脱落, 無音化）」, 「音（素）の転化」, 「代償延長」, 「音の弱化」, 「縮約」, 「二重母音化」, 「単母音化」, 「語末音法則」, 「語頭音法則」, 「重音脱落」, 「イオタシズム」, 「ツィタシズム」, 「ロータシズム」, 「語末音省略」, 「母音化」, 「形態音素的变化」, 「言語による先史研究（言語学的古生物学）」, 「言語接触」, 「言語連合（言語同盟）」, 「バルカニズム」, 「収束」, 「言語の混合」, 「基層」, 「上層」, 「傍層」, 以上 46 項目.

『言語学大辞典』第 7 巻：文字編（三省堂 1998 年）：「エトルリア文字」, 「ラテン文字」, 「ギリシア文字」, 「ブリュギア文字」, 「リュキア文字」, 「リュディア文字」, 「カリア文字」, 「シデ文字」, 「クレタ文字」, 「フェストスの円盤文字」, 「ミノア象形文字」, 「ミノア線文字 A」, 「ミノア線文字 B」, 「キュプロス文字」, 「キュプロ・ミノア文字」, 以上 15 項目.